

氏名(国籍)	^{きむ} 金	^{よん} 榮	^{みん} 敏(韓国)
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博甲第2734号		
学位授与年月日	平成14年1月31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	文芸・言語研究科		
学位論文題目	日韓両言語の格と統語構造		
主査	筑波大学教授	Ph. D.	岡崎敏雄
副査	筑波大学教授		高田誠
副査	筑波大学教授	Ph. D.	カイザー・シュテファン
副査	筑波大学教授	博士(言語学)	鷲尾龍一
副査	筑波大学助教授	Ph. D.	竹沢幸一

論文の内容の要旨

本論文は、80年代以降の生成文法におけるGB理論から極小主義理論に至るまでの理論的枠組みに基づき、日韓両言語における格と統語構造に関する問題を考察したものである。具体的には構造格である主格と対格とを中心に、日韓両言語における格と統語構造との問題及びそれに関連する問題について対照分析を行い、日韓両言語において主格と対格とがどのような統語構造の下で、どのような原理によって付与されるのかを究明するとともに、両言語の間にみられる類似点と相違点を明らかにしたものである。

本論文は7章からなる。

第1章で本研究の目的と対象、研究方法及び本論文の構成等について述べたあと、第2章では、日韓両言語の主格と対格の格付与の問題とそれに関連する問題について考察し、日韓両言語の格理論は根本的なところでは普遍文法の格理論と同じであることを明確に示している。すなわち、両言語において主格は[+tense]の時制辞によって、対格は動詞によって付与されることを検証し、またこのような両言語の格理論に対して例外であるかのように見える格付与の問題、すなわち両言語の自発動詞構文、主語繰り上げ構文や日本語の「〜く(〜に)する」構文及び韓国語の長形使役構文コントロール構文などに見られる格付与の問題も両言語の格理論で説明できることを明らかにしている。

第3章では、日韓両言語に見られる格重出構文を取りあげ、両言語の格重出構文の間に見られる類似点と相違点を明確に示し、両言語の格重出構文の統語構造とその格付与の原理を明らかにしている。韓国語では、主格・対格・与格重出構文が許されるのに対し、日本語では、基本的には主格重出構文のみが許されるが、日本語においても一定の条件の下では与格重出構文が許されたり、また基底では対格重出の構造が許されることを示す現象が観察されることを記述している。格重出構文の派生については、いわゆる所有者繰り上げによって派生とする立場(移動分析)と基底生成されるとする立場(基底生成分析)とがあるが、本論文では、語順かき混ぜ、関係節化などの統語的なテストや格助詞の省略可能性に関する考察を通して、移動分析が正しいことを主張している。次に、格重出構文における格付与の問題について、重出する格は同じ格付与子によって付与(照合)されると考え、格重出構文の重出する格を同質的なものではなく、host DP以外の名詞句に現れる格を主題マーカであるとする先行の主張を検討し、その分析の問題点を指摘することによって、少なくとも格重出構文においては、重

出する格助詞はすべて格助詞と見なす方がより妥当であることを示している。最後に、与格重出構文の統語構造と格付与に関する問題について二つの可能な分析を提示・検討し、与格重出構文は真の格重出構文ではなく、重出する与格名詞句の一方は与格名詞句であるが、もう一方は場所を表す後置語句と見なした方がより妥当であるとする主張を展開している。

第4章では、日韓両言語の間接受動文を取りあげ、その統語構造と格付与の問題について考察し、両言語の間接受動文の間に見られる相違点を明らかにしている。まず、統語的な受動化の派生を想定できる能動文を持たない受動文の間接受動文と見なした上で、日韓両言語における間接受動文の分布を示し、両言語の間接受動文が複文深層構造から派生されることを検証している。そして、韓国語の対格重出能動文を持つ受動文を対格重出能動文から派生した直接受動文であるとする先行研究を検討し、対格重出能動文における全体名詞句のみが必ずしも目的語であるわけではないということや、受動文における部分名詞句が移動可能であること、さらに、「受動形」の違いを通じた検証を基に、それらの受動文はやはり間接受動文と見なすべきであるということ論じている。最後に、主格重出受動文の派生の問題について考察し、主格名詞句同士の語順が固定されていることや、「受動形」の違いを基にした分析から、主格重出受動文は直接受動文であることを明らかにしている。

第5章では、軽動詞構文の統語構造と動名詞への対格付与の問題について考察し、軽動詞構文の統語構造はどのように分析できるかということと、動名詞の対格標示の成立可否には如何なる要因が働き、またその点において日韓両言語の間にはどのような相違点が見られるかを明らかにしている。まず、軽動詞構文の統語構造については、主題化、語順かき混ぜ、擬似分裂文化などの統語現象の検証を通して、以下の三点を明らかにしている。

①非対格の動名詞の場合、主題化、語順かき混ぜ、擬似分裂文化が適用されないのは、その主語が深層構造において目的語であることにより、適正束縛条件の違反が起こるからである。これに対して、他動詞的な動名詞と非能格の動名詞の場合は、その主語が深層構造においても主語であるため、適正束縛条件に違反せず、主題化などが適用され得る。

②非能格の動名詞と他動詞的な動名詞の場合、その主語は動名詞句の外側（つまり、軽動詞を主要部とする動詞句の指定部の位置）に生成される。

③両言語の対格重出の軽動詞構文において、二番目の対格名詞句（即ち動名詞句）に主題化、類似分裂文化などが適用されないのは、対格名詞句同士の統語構造上の相違、つまり一番目の対格名詞句が二番目の対格名詞句の中から繰り上がったものであるということに起因する。

なお、日韓両言語の軽動詞構文において動名詞への対格付与には次のような要因が働いていることを明らかにしている。

①自動詞的な動名詞の場合、日本語において「VNをする」の成立可否は動名詞の非能格性・非対格性によって決まる。つまり、非対格の動名詞は「VNをする」構文を形成できない。ただし、動名詞が連体修飾される場合は「VNをする」構文のみが許されるが、この場合の「する」は「彼は青い目をしている」の「する」と同類の他動詞であると考えられる。一方、韓国語においては動名詞の非能格性・非対格性にかかわらず「VNをする」構文が許される。韓国語における非対格動名詞への対格付与は、Burzioの一般化に従わず対格を付与できるという、[hata]を含む韓国語の軽動詞に見られる特性に起因するものであると考えられる。

②他動詞的な動名詞の場合は、日韓両言語に同じ制約が働いていると考えられる。動名詞がアスペクト的に「活動の達成」に属するものか、あるいは、「完了結果に片寄らない継続動作」を意味するものである場合にのみ「(NPの) VNをする」構文が許容されると考えられる。

第6章では、移動動詞構文における対格付与の問題について考察している。まず、日韓両言語の間に見られる相違点を考察し、韓国語では「着点」をも対格で標示できることを示している。そして「起点」「着点」の名詞句がすべて対格で標示され得るわけではなく、対格が付与される場合も、付与されない場合もあることについて、「移動の意志的なコントロール性」による動詞の非対格性のみでなく、移動動詞に含意される「過程性」も一つの

要因として働くことを明らかにしている。また、移動動詞構文に現れる対格に関して意味格とする分析と主題マーカ―とする分析の可能性について検討し、まず、意味格とする分析についてはそのような分析も可能であるが、構造格と見なす分析も可能であることを確かめている。次に主題マーカ―としての分析については格助詞と見なした方がより妥当であると考えらることを明らかにしている。

第7章では、本論文のまとめを行うとともに、今後の課題について述べている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、日本語と韓国語の両言語について、統語論の立場から対照言語学的に分析を行ったものである。統語論的な課題のうち、格の問題を取り上げ、格をめぐる重要な問題について、さまざまな角度から考察を加え、それぞれ精密な論議を展開し、それぞれの問題に対し著者独自の分析、見解を提示していることは大いに注目に値する。

日本語、韓国語という個別言語を分析の対象としながら、その言語学的議論、推論において、最新の生成文法理論の枠組みを取り入れ、その中から、言語一般にわたる普遍文法的視点等、一般言語学的なパースペクティブを指向している点は、本論文が、単なる日韓両言語の分析にとどまらず、言語理論全般に対して大きく貢献するものであり、この点で、本論文は高く評価できる。

もとより、格に関する課題は、本論文で取り上げたもののほかさまざまなものがあり、本論文ですべてが尽くされたわけではないが、ここで取り上げられたいくつかの論点は、この分野の研究課題として重要なものであり、学位論文の課題として妥当である。本論文で展開された議論は、その推論の精密さ、一般言語学的な視点の広さという点で高く評価され、本論文は、博士の学位論文として完成度の非常に高いものとなっていると判断される。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。